

月の花挽歌 ～3.月光値千金～

3.月光値千金

3-1

米国のリーマン・ブラザーズが経営破綻して世界恐慌の引き金となった前日の、2008年9月14日。真紀は東京駅から長野新幹線に乗り終着駅の長野駅でJR篠ノ井線に乗り換えると、六駅目の日本三大車窓で知られている姨捨駅に降り立った。

この日は中秋の名月に当たり、駅から間近にある松尾芭蕉ゆかりの長楽寺を中心に『第二十五回信州さらしな・おばすて観月祭』が催されていた。

眼下の斜面に、棚田百選に認定されている刈り取りを待つ棚田があり、その先には千曲川を挟んで善光寺平が広がっていた。

お昼時だったので、乗降客に棚田米のおにぎりや月見汁が地元のボランティアから供されていた。真紀はおにぎりを手渡してくれた婦人に礼を言いついでに、『W酒造』への道筋を聞いた。

一年前の丁度今頃、銀座のおでん屋の個室で悪さをしたお詫びだと、照れ隠し気味に堀内からプレゼントされた信州の鎌倉と言われる塩田平に江戸時代から続くK紬工房の上田袖を着ていた真紀は、観光客で賑わう中にいても、ひととき異彩を放っていた。

クラブ『こはる』の近くにある呉服屋〈銀座もとじ〉で新調して、その日が仕立ておろしの黄八丈の訪問着の帯締めを解いただけのまま抱かれた時の帰りしなに、真紀は『お多幸』の店主の顔をまともに見られない程に身体の芯に火照りを抱えていた。

千鳥ヶ淵の桜が満開の頃。年甲斐もなく憂き身をやつした拳句の果てに別れた日本画家のアトリエでの幾度かの房事。天然岩絵の具の接着剤となるニカワの得も言われぬ匂いを含んだ明け方の後朝（きぬぎぬ）。

春秋に分銅をのせると、真紀は秋の重さに動かしがたい運命を感じていた。

真紀は教えられた通りに踏切を渡ると、実が色付きはじめたリンゴ畑に目を見張りながら、坂道を下って行った。

堀内が膵臓癌で、呆気なく男盛りに幕を閉じてから半年になる。男の生まれ育った所が無性に見たくなって、意を決したものの、やはり張りつめていたのか、真紀は秋の日差しの心地好さやで気持ちが緩むと、装いに不釣り合いな伸びをした。電車で来た事に、心から自足していた。